

5. DBTの臨床応用

坂 佳奈子/林 光博/宮下 絢子/佐藤 未来 四谷メディカルキューブ乳腺外科

2024年度よりデジタル乳房トモシンセシス (digital breast tomosynthesis : DBT) の保険適用が認められた。それによりDBTは検診だけでなく、臨床の場面でも広く使用されることが期待されている。また、最新の『マンモグラフィガイドライン第4版』¹⁾ではトモシンセシスの章が追加され、日常的に使用すべきモダリティとなってきたと考える。

筆者は、保険収載前にDBTの乳がん検診における有用性についての検討を行い、本誌でも報告してきた²⁾。本稿では、臨床の場面でのどのような時にDBTが役に立つのかを、実際の画像を供覧しながら説明したい。

検診での有用性のまとめ

まず初めに、先ほど示した筆者の論文の要旨を記載する。

2021年に*Breast Cancer*誌にて報

告³⁾したdigital mammography (DM)とDBTの比較試験では、要精検率はDM単独3.6%、DM + DBTで2.6%と、DBT併用例で向上した。がん発見率は共に0.17%と改善を認めなかったものの、偽陽性率がDM + DBTにて減少したため、陽性反応適中度はDM単独4.7%に対し、DM + DBTが6.5%と向上した。

また、2022年の乳房超音波検査 (US) を併用した場合の論文では⁴⁾、DM + US群とDM + DBT + US群を比較すると、要精検率は3.1% vs. 2.6%、がん発見率は0.23% vs. 0.49%、陽性反応適中度は7.5% vs. 19.0%と、すべての項目についてDM + DBT + US群の方が優れていた。

これらのデータからは、海外と同様に、日本においてもDBTの併用で感度、特異度などの向上が期待できることが明らかとなった。

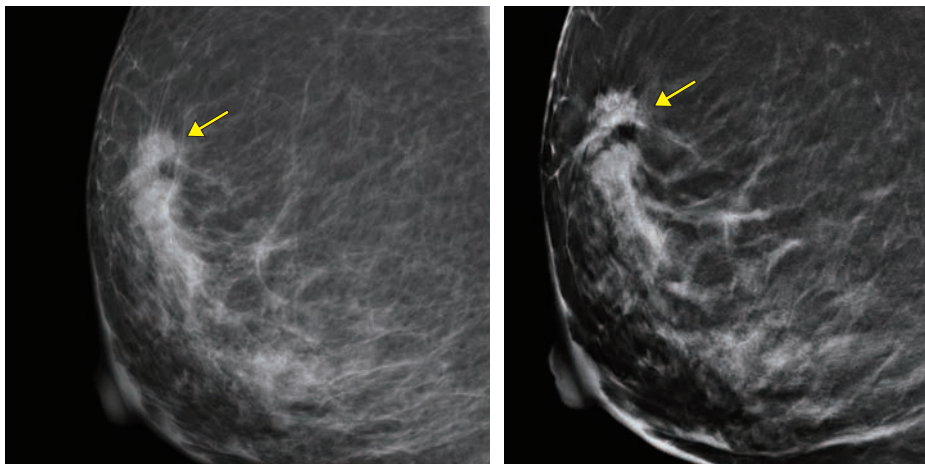
検診と同様に臨床の現場で役立つと考えられること

1. 悪性の確信度の向上

DBTでは乳腺の重なりが排除され、線構造の変化が鮮明に見えるため、DMのみでは認識しづらい構築の乱れや、高濃度乳房における比較的小さい微細鋸歯状やスピキュラを伴う腫瘍などの乳がんが疑われる所見をはっきり認識できる。診断に携わる医師にとっても、悪性の確信度が向上するというメリットがある。

図1の症例では、通常撮影のDM (a)のみでは病変ははっきりしないが、DBT (b)で見るとスピキュラがはっきり確認でき (←)，乳がんである確信度の上昇が認められる。

DMのみでも乳がんであると考えが、DBTを用いることで、より確実な所見



a : 通常撮影 (DM)

b : DBT スライス画像

図1 DBTでスピキュラが鮮明になり乳がんの診断が可能となった症例